平成 20 年 12 月 31 日

『危機の宰相』（沢木耕太郎 著）　読後メモ

～ゼロ成長と『世界の静かな中心』～

何を読んでも面白い作家，何を聞いても一定水準以上の充実感を与えてくれるミュージシャンがいる．となると，その全ての作品を体験したくなるかといえば，逆であって，『もったいないので』ちょっとずつ読んだり聴いたりすることになる．そんな経験はないだろうか．兵藤にとっては，司馬遼太郎や沢木耕太郎，ソロコンサートを未だ聴いていない Keith Jarrett などが相当する．

この秋，何かの記事で下村治のことを読み，『危機の宰相』に詳細が描かれていることを知って，珍しく単行本を購入した．その直後，文庫本化された本書を書店で見つけ，ふて腐れてしばらくこの本を手にしなかった．読み始めれば一気に読了することは分かっていたので，楽しみを先延ばしにしていたこともある．

年末に読み終わり，珍しく，何度も主要箇所を返す返す再読することになった．内容は，『所得倍増計画』を推進した池田勇人総理を中心とする，昭和 30 年代の，人・時代・政治のドラマを，正確かつ印象的な素材で切り取っているのだが，中でも官庁エコノミストである下村治の言葉が印象的である．

とりわけ，『所得倍増計画』の理論的な背景にもなった下村の経済理解では，オイルショック後の日本が『ゼロ成長』に至ることを的確に予想していることに感心する．＜…ゼロ成長を生きるためには…膨大にある設備投資関連の産業は整理されていくことになるでしょう…＞という 1976 年の下村の発言主旨が，すでにオイルショック前の 1971 年に公表された論文に散見されるのだ．さらにバブル最盛期の 1987 年の『日本は悪くない―悪いのはアメリカだ―』なる本では，1989 年以降のわが国のバブル経済の本質や，今回の同時不況を招いたアメリカ過剰消費体質の問題点も指摘しているという[1]．

下村は，ゼロ成長下の日本は，「江戸時代のような姿になるのがいい．文化とか芸術とか教養に力を入れる時代になるべきだ」と発言しているそうだ[2]．これは単に，人口と経済が停滞した江戸時代とのアナロジーで，グローバル化している現代に直接反映させることはできないと思うが，怜悧なエコノミストの言葉として一考に値するだろう．

2008 年は公的にも現実にも，交通需要減少を迎えた “Inflection point（変局点）” の年であったと理解している．高度成長からゼロ成長への転換を，明瞭・冷徹な理論で考究した下村の姿は，交通需要変局点で右往左往する我が身にとって，一つの脱出口のように見えた．

さて，この本の結びで引用される半世紀前の三島由紀夫の言葉で，沢木耕太郎の瑞々しい感受性を再確認することになる．

『日本は世界の静かな中心であれ』（1959 年読売新聞元旦特集）　と．

---

[1] この本は 2009 年早々に文庫本が発売されるようだ（文藝春秋 : 550 円）.『20 年前の下村予想』『世界同時不況予言の書』などのサブタイトルが冠せられるのだろうか．白州次郎的なブームになったりして．

[2] 2007 年 4 月放映の『その時歴史が動いた』で取り上げられたらしい．見逃した．アーカイブ『NHK オンデマンド』でも見つからず残念．